

ゆるされて聞く・信じて聞く



先月、真光寺若院・近藤は京都本山へ参り、住職資格を得るための最後の教修を修了してまいりました。お参りでご迷惑をおかけした皆様、この場を借りてお詫び申し上げます。そして今月は、その教修の場で心に残ったことばをご紹介します。

「浄土真宗では聴聞がもっとも大切だ」とよく言われます。「聴聞」というと、お寺でなにやら難しい話を聞くようなイメージが強いと思いますが、親鸞聖人はこの言葉を、「仏様のお救いを聞く」という意味で用いられています。それは決してお寺の中だけでなく、日々の生活の中で経験する事柄の中に聞いていくことも意味します。



アニメ「親鸞さま」より

聖人はその主著『顕浄土真実教行証文類（教行信証）』の中で、「聴聞」という言葉に「ゆるされて聞く、信じて聞く」と注を付けられています。広辞苑を引くと、確かに「聴」という漢字には「ゆるす」という意味があるようです。

これをある先生は「これまでも、そしてこれからも、いくつもの間違い（愚痴や怒り・ねたみ・そねみ等）を繰り返していく私たち。それに気付かず、“自分は正しい”と勘違いしながら生きていく私たち。しかしそんな私たちでも、いつでも仏様からの呼び声に出遇えることを、聖人は“ゆるされて”と表現されたのではないか」と言われました。そして、「聞」の意味は…

「聞」といふは、衆生、仏願の生起本末を聞きて疑心あることなし。これを聞といふなり。

親鸞聖人『顕浄土真実教行証文類』より

<現代語訳>

「聞」とは、阿弥陀仏が「衆生を必ず救う」という願いを起こされた理由（この私が、苦悩に満ちた人生を迷いながら歩んでいること）と、その願いがすでに成就していて、今生きている私を救済していること（生きる支えとなっていること）を聞いて、疑いの心がないのを、「聞」というのである。

阿弥陀如来の救いとは、“この先どこか良い場所にたどり着ける”ということよりも、そこに至る過程・私たちの人生の歩みそのものにはたらき続けてくださる、大きな願いです。ある先生は、「“ナモアミダブツ”のお念仏は“我にまかせよ、必ず救う。我にまかせよ、安心しなさい。我にまかせよ、そのままでいい。我にまかせよ、いつも見えています。我にまかせよ、一人じゃないよ”と呼びかけられる阿弥陀さまの呼び声です。」と表現されました。

私のありのまま（愚痴や怒りの心を抱えた私のまま）を支えてくれるはたらきの中で人生を歩んでゆけることを、その愚痴や怒りのせいで忘れていた私たち。それを再び思い出し、確かめるために、私たちは聴聞を重ねるのです。

